

【論文審査結果】

本論文は、乳幼児期の子どもに対して動物介在活動の実践から「生命尊重の心情」をはぐくむ方策を検討し、試案を提示したものである。この動物介在活動については、1990年代後半から本格的な探求が開始され、世紀の変わり目には高齢者施設に導入され、一定の効果が認められた。そして、2010年代には医療機関における実践報告もしばしばみられるようになったものである。しかし、乳幼児を対象としたものは乏しく、この点で本論文に一定の新規性が感じられる。

また、2017年の「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども園・保育要領」等が改定され、「保育所保育指針」の「4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項」における「(二) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に「自然との関わり・生命尊重」が新たに加えられた。「命あるものとしていたわり、大切な気持ちをもって関わるようになる」との文言が見られるように「生命尊重」は、近年、保育・幼児教育界で関心が高まりつつある概念であり、本論文における課題意識と分析は時代の要請に応じるものでもある。

審査員の評価点として、

- ・研究方法としても、保育者、保育者養成課程に在籍する学生、保護者に対して質問紙、面接など質的、量的手法を駆使し妥当な成果を得ていること。
- ・インタビューや自由記述の分析では多面的な分析が行われ丹念に結果がまとめられていること。保育者養成の教育内容や方法、教材開発への検討がなされ、乳幼児施設においても実証的な動物介在活動の調査、保育者養成課程の学生に参加体験を分析していること。
- ・研究成果の社会的還元の可能性として地域社会における動物介在活動の実践の試案を提示していること。が挙げられた。

一方、提案された乳幼児施設において実施可能な動物介在活動には、子どもの発達段階や育ちの領域の視点を明確にした分析を加えること、生涯発達段階を見据えた「生命尊重の心情」の質的高次化への言及を行うことで有用性が増すと考えられること。

- ・移動動物園の実践には、予想以上の困難が伴うこと、学生への視聴教材としてマルチメディアの積極的な活用等が指摘された。

なお、成果報告・公表として、仏教系幼児施設における動物介在活動と関連させた論考は『日本仏教社会福祉学会年報』(48号、2018)、保育者養成課程における動物介在活動、視聴教材に関するものはそれぞれ『保育者養成教育』(1号：2017年、2号：2018、日本保育者養成教育学会)と全国レベルの学会機関誌に査読を経て掲載されている。

百瀬ユカリ学位請求論文審査委員会では、2018年10月8日および10月10日の口頭試問後、それぞれ評価を出し合い総合的に判断した結果、学位請求論文『乳幼児施設における生命尊重の心情を育む動物介在活動と保育者養成課程への導入』は評価すべき点があり、本研究科の定める「学位請求論文の評価基準」を充足していることを含め、博士(社会福祉学)として相応しいものと認めるものである。